

『人間失格』の女性像

—『暗夜行路』との比較を中心として—

青木京子

〔抄録〕

『人間失格』の「コキユ」の問題については、志賀直哉の『暗夜行路』を想定した作品だと指摘されている。「コキユ」そのものを追及した論文もみられ、示唆的ではある。

しかし、『人間失格』と『暗夜行路』の詳細な比較を通し、その根拠を提示した論文は見られない。

『人間失格』の草稿には、「コキユ」の場面に「暗夜行路」の記述が見られ、『暗夜行路』を想定した作品であることは明確である。が、「コキユ」の問題だけではなく、母の欠落、醜い女や淫売婦の造形、代理母のような年上の女性との接触等、双方には多くの共通点が見られる。従って、『人間失格』は『暗夜行路』をかなり意識した作品であるといえる。

『暗夜行路』は多くの女性と接触することにより、「暗夜」を乗り越え、「明るい」世界へと向かう作品であるが、『人間失格』は、徐々に女給や淫売婦との深みにはまり、全幅の信頼を寄せた内縁のヨシ子にも裏切られ、破滅してゆく。

太宰は晩年には志賀直哉を辛辣に批判しているが（「如是我聞」、志賀直哉の作品をかなり視野に入れ、作品を構築している〈懶惰の歌留多〉、『津軽』等）。

太宰は『人間失格』を構築するのに、志賀直哉の集大成ともいえる『暗夜行路』をかなり意識していたのではなからうか。

キーワード…『暗夜行路』、「コキユ」の問題、〈男の破滅物語〉

一、はじめに

『人間失格』には、母親や女中、下宿の小母さんやアネサ、セツチ

やん、カフェのキヌさん、淫売婦、喫茶店の女給、女子高等師範の文科生の同志、銀座の大カフェの女給ツネ子、雑誌社の女記者シヅ子とその娘シゲ子、京橋のスタンド・バアのマダム、煙草屋のヨシ子、葉

屋の不具の奥さん、六十に近い赤毛の醜い女中等夥しい女性が登場する。主人公の大庭葉蔵はこれらの女性と接触し、恐怖を覚えて破滅してゆく。

『人間失格』に描かれた女性群を注視してみると、志賀直哉の集大成とされる『暗夜行路』の女性達と近似しているのに気づく。

『暗夜行路』との比較については、荻久保泰幸氏は「『人間失格』はやはり『暗夜行路』を意識して書いているところがある」とし、「コキュ」の問題については、細谷博氏も「これは志賀直哉の長編『暗夜行路』の主人公時任謙作が、妻直子の過ちに対して示す『許す許さぬ』の姿勢を意識した、ととれる部分です。」と指摘している。さらに、国松昭氏も「コキュ」の問題を詳細に分析し、「『暗夜行路』の謙作と直子を『人間失格』の葉蔵とヨシ子に当てはめて考えることは可能である。」⁴と言及している。

しかし、それらは「コキュ」の問題のみの指摘にとどまり、『暗夜行路』との詳細な比較により論証されたものではない。

『人間失格』の大庭葉蔵は、冒頭から〈生活不能力者〉として、また『暗夜行路』の時任謙作も同様の設定がなされ、どちらも「世間」や「人と人との関係」の複雑さに疲れ切つてゆく過程が描かれている。

本稿では『人間失格』と『暗夜行路』の女性に焦点を当て、それらを丁寧に比較することにより、『人間失格』が『暗夜行路』を想定して描かれた作品であるということを証明していくことにする。

二、母の欠落

『人間失格』も『暗夜行路』も母親の存在は稀薄である。

『人間失格』の父親は東京土産の「獅子舞」のシーンで、「何といふ失敗、自分は父を怒らせた、父の復讐は、きつと、おそるべきものに違ひない」（『第一の手記』）とし、「父が死んだ事を知つてから、自分はいよいよ臍抜けたやうになりました。父が、もうゐない、自分の胸中から一刻も離れなかつたあの懐かしくおそろしい存在が、もうゐない、自分の苦悩の壺がからつぽになつたやうな気がしました。」（『第三の手記・二』）等と、葉蔵にとつては常に絶対的な存在、〈恐怖〉の対象として描かれている。

それに対し、母親は「父は東京から帰つて来て、母に大声で言つてゐるのを、自分は子供部屋で聞いてゐました。」「自分は、その父や母をも全部は理解する事が出来なかつたのです。」（以上「第一の手記」）、「おう、いい男だ。これあ、お前が悪いんじゃない。こんな、いい男に産んだお前のおふくろが悪いんだ」（『第三の手記・二』）、等とわずかに登場するだけで、その存在は極めて稀薄であり、父親のやうにクローズアップされてはいない。

『暗夜行路』の父も「常に／＼冷たかつた」とし、〈角力事件〉⁵では、「復讐」かと思えるほど、おぞましく、冷徹な父親として描かれている（『前篇 序詞』）。

しかし、母親は「前篇 序詞」に、「私の母が産後の病気で死」に、「私は二ヶ月前に死んだ母を憶ひ、悲しい気持ちになつた。」と、謙作

の母が早世した悲しみが綴られているだけである。

太宰治や志賀直哉の年譜を辿ると、彼等の実際の母親は大きくなるまで生存（太宰の母、たねは昭和一七（一九四二）年、太宰三十四歳の時、志賀の母、銀は明治二八（一八九五）年、志賀十二歳の時他界）しており、母親の存在を浮上させてもよさうなものである。が、『人間失格』も『暗夜行路』も自伝的な作品であるといわれているにもかかわらず、母親の存在は欠落している。双方の作品にはこのような共通性が見られるのである。

三、醜い女

『人間失格』や『暗夜行路』には、牛肉屋や酒亭の女中等、あまり重要な役割を付与されていない女性も多く描かれているが、『人間失格』の「第一の手記」や作品末尾の醜い女中、『暗夜行路』の「前篇最終章」の醜い女等はそれぞれ重要な役割を担っている。特に、『人間失格』の最終章の「ひどい赤毛の醜い女中」は、『暗夜行路』「前篇最終章」の「平凡な醜い、そして忠実なあばたのある女」と二重写しになり、注目すべき箇所である。

まず、『人間失格』の葉蔵は「女中や下男から、哀しい事を教へられ、犯され」ている。そしてそれを「人間の行ひ得る犯罪の中で最も醜悪で下等で、残酷な犯罪だ」とし、「後年さまざま、自分がつけ込まれる誘因」になったとされている（「第一の手記」）。さらに、葉蔵は「ひどい赤毛の醜い女中」にも数度も「変な犯され方」をしている

のである。この「醜い女中」の記述は、『暗夜行路』の謙作が、大森の生活の中で「今まで呼吸してゐたとは全く別の世界」で、「平凡な醜い、そして忠実なあばたのある女」と「互に惨めな人間として薄暗い中に謙遜な心持で静かに一生を送る」ことを夢想する記述と妙に重なり合うように思われる。

・自分の生れて育つた町から汽車で四、五時間、南下したところに、東北には珍しいほど暖かい海辺の温泉地があつて、その村はづれの、間数は五つもあるのですが、かなり古い家らしく壁は剥げ落ち、柱は虫に食はれ、ほとんど修理の仕様も無いほどの茅屋を買ひとつて自分に与へ、六十に近いひどい赤毛の醜い女中をひとり附けてくれました。（『人間失格』、「第三の手記・二」、傍線は筆者、以下同じ）

・そして、今まで呼吸してゐたとは全く別の世界、何処か大きな山の麓の百姓の仲間、何も知らない百姓、しかも自分がその仲間はづれなら一番いい。其処で或る平凡な醜い、そして忠実なあばたのある女を妻として暮らす、如何に安気な事か、彼は前日の女を想つて少し美し過ぎると思つた。然しあの女が若し罪深い女で、それを心から苦んでゐるやうな女だつたら、どんなにいいか。互に惨めな人間として薄暗い中に謙遜な心持で静かに一生を送る。（『暗夜行路』、「前篇 第二・十四」）

双方の女性には「醜い」という語彙レベルでの一致が見られる。「ひどい赤毛」と「あばたのある」という表現は完全に一致するわけではないが、美醜の程度においてはかなり「醜い」状態を示し、近似

している。さらに「互に惨めな人間として薄暗い中に謙遜な心持で静かに一生を送る」というくだりは、ある種の諦観に達した状況の中の表現であり、『人間失格』の葉蔵が「人間、失格。もはや、自分は、完全に、人間で無くなりました。」と自ら思い、人間性を剥奪された時点、いわば、諦めの境地に陥った時点と相似しているように思われる。葉蔵も謙作も全くの別世界で醜い女と人生を送ろうとしているのである。『人間失格』の末尾の「醜い「老女中」は、『暗夜行路』の「前篇 最終章」の表現を想定したものではなからうか。

ただ、『暗夜行路』には「互に惨めな人間として薄暗い中に謙遜な心持で静かに一生を送ろう」と夢想する場面が描かれているが、これはあくまでも「夢想」であって、実際には女と同居はしてはいない。

それに対し、『人間失格』の女中は葉蔵と実際に夫婦のような生活をしている。「東北」の「村はづれ」の茅屋で、「六十に近いひどい赤毛の醜い女中」から数度も犯されている。ここには、劣位極まりない最悪の「老女中」にさえ「犯される」という、主人公の零落ぶりが強調されているのである。

四、水商売の女性

『人間失格』の葉蔵は、蓬萊町のカフェの女給や銀座の酒池肉林の大カフェの女給、京橋のスタンド・バアのマダム、淫売婦等、多くの水商売の女性と接触している。それらの女性に恐怖しながらも、主人公は身近な女中から水商売の女性へと深みにはまり、破滅してゆく。

『暗夜行路』の謙作も多くの水商売の女性と関わっている。謙作は吉原の引茶屋の登喜子や小稲、銀座のお加代、千代子などと接し、深川の曲輪で放蕩し、尾道では百姓娘のプロステイチユートと一夜を共にする。双方とも数多の水商売の女性と接触するが、ここでは特に、淫売婦の造形が近似しているように思われる。

まず、『人間失格』の淫売婦は次のように造形されている。

自分には淫売婦といふものが、人間でも、女性でもない、白痴か狂人のやうに見え、そのふところの中で、自分はかへつて全く安心して、ぐつすり眠る事が出来ました。みんな、哀しいくらゐ、実にみぢんも欲といふものが無いのでした。（略）自分は、いつも、その淫売婦たちから、窮屈でない程度の自然の好意を示されました。何の打算も無い好意、押し売りでは無い好意、二度と来ないかも知れぬひとへの好意、自分には、その白痴か狂人の淫売婦たちに、マリヤの円光を現実に見た夜もあつたのです。（「第二の手記」）

この「白痴か狂人」の淫売婦たちは、「全く安心して、ぐつすり眠る事の出来る、癒しの存在として描かれている。そして「マリヤの円光を現実に見た夜もあつた」と、男の快楽を解消するだけではなく、ある種の〈女神〉のような存在にまで昇華させている。

このような表現は太宰前期の「HUMAN LOST」にも「私は享楽のために売春婦買ったこと一夜もなし。母を求めに行つたのだ。乳房を求めに行つたのだ。」と叙述され、『人間失格』と同様のニュアンスが窺える。

『暗夜行路』の淫売婦も次のように記されている。

彼は然し、女のふつくらとした重みのある乳房を柔かく握つて見て、云ひやうのない快感を感じた。それは何か値うちのあるものに触れてゐる感じだった。軽く揺ると、気持ちのいい重さが掌に感ぜられる。それを何と云ひ現はしいか分からなかつた。

「豊年だ！ 豊年だ！」と云つた。

さう云ひながら、彼は幾度となくそれを揺振つた。何か知れなかつた。が、兎に角それは彼の空虚を満たして呉れる、何かしら唯一の貴重な物、その象徴として彼には感ぜられるのであつた。

（前篇 第二・十四）

『暗夜行路』の主人公は「悪い場所」のみが「気軽に彼の為めに戸を開」き、「惨め」と思いつつも、その方へ自然と足が向く。娼婦の乳房を柔かく握り、それが「彼の空虚を満たしてくれる何かしら唯一の貴重な物」と感じ、「豊年だ！ 豊年だ！」と繰り返す。葉蔵も謙作も淫売婦を快楽の捌け口として利用するのではなく、それらを「貴重なもの」、「安心できるもの」、いわば、母性を回帰させるもの、いや、それ以上の〈女神〉のような存在として捉えている。ここに、二作品の共通性があると思われるのである。

淫売婦だけではなく、銀座の大カフェの女給、ツネ子も同様である。ツネ子は葉蔵の情死の相手となるが、彼女に対しても「水底の岩に落ち附く枯葉」と称している。葉蔵にとって水商売の女性には「落ち附く」存在、癒しの存在なのである。

しかし、双方の作品の決定的な違いは、『暗夜行路』の謙作は、水

商売の女性を乗り越えて再生してゆくが、『人間失格』の葉蔵はそれらの女性と接触するに従つて零落してゆくことになる。

五、年上の女性

『人間失格』の葉蔵は、多くの年上の女性とも関わってゆくが、中学校時代の下宿の小母さんや堀木の老母以外の年上の女性とは、性的な対象としての接点が見られる。葉蔵は、幼少の頃は「女中」に「性的ないたずら」をされ、中学校時代には「下宿先の姉妹」に「押し掛け」られ、高等学校時代には東京へ出て、画学生の堀木によって「淫売婦」を知らされる。共産主義の秘密結社では女子高等師範の文科生の「同志」と出会い、「姉」として「慕われる」。「銀座の大カフェの有夫の女給」ツネ子とは鎌倉の海で「心中」し、高円寺の子持ちの「男まさり」のシヅ子のアパートでは「男めかけ」みたいな生活をする。さらに、京橋のスタンド・バアのママムとは「得体の知れない」ものとして「寄生」する。そして、葉蔵の不具の未亡人の「やさしさ」に溺れて「不義」を犯し、「モルヒネ中毒」に陥る。最終的には赤毛の老女中と「醜関係」を結ぶ。

三谷憲正氏が指摘するように、彼女らは全て年上の女性であり、二階の住人である。彼女らとは決して正常な結婚生活は成就しない。そればかりか、葉蔵は年齢を重ねるに従つて、不幸で悲惨な女性と関わり、破滅してゆく。

同様に『暗夜行路』も年上の女性との関わりが深い。「前篇 序詞」

には、亡くなった生母の代理母の役割をするお栄が登場している。このお栄は終始重要な人物として描かれ、「湯上りに濃い化粧」をし、「酔ふ」と謙作を「抱き締める」等、「危険な性の匂い」のする女性である。そして『人間失格』のカフェのツネ子やスタンド・バアのマダムのように、概ね主人公を庇護する女性である。

『暗夜行路』の愛子の母も実母の面影をもつ親戚筋の女性で、やはり年上である。

その他、銀座、曲輪の女性達も年上の女性が多く、『人間失格』と相似している。『人間失格』の年上の女性も『暗夜行路』のそれらの女性も、一時は気に入って接触する。が、正常な結婚生活には至らない。

〈生活不能力者〉の主人公、大庭葉蔵は多くの年上の女性と接触し、「女道楽」、「女達者」と名付けられるが、彼女達はあくまでも一時を通過するための女性ではない。『暗夜行路』の時任謙作も大庭葉蔵と同様の設定で、年上の女性達との関係は、妻になる直子を得るまでの通過点ではないのである。

六、「コキュ」の物語

1、〈ヨシ子事件〉と〈直子事件〉の比較

一六世紀にフランスのモンテーニュが唱えた⁷とされる「コキュ（寝とられる）」の物語は、『人間失格』ではヨシ子が「商人」に犯される事件がそれに相当する。

自分の部屋の上の小窓があいてゐて、そこから部屋の中が見えます。電気がついたままで、二匹の動物がゐました。

自分は、ぐらぐら目まひしながら、これもまた人間の姿だ、これもまた人間の姿だ、おどろく事は無い、など劇しい呼吸と共に胸の中で眩き、ヨシ子を助ける事も忘れ、階段に立ちつくしてゐました。（第三の手記・二）

このような姦通事件の後、主人公は、

自分は、人妻の犯された物語の本を、いろいろ捜して読んでみました。けれども、ヨシ子ほど悲惨な犯され方をしてゐる女は、ひとりも無いと思ひました。どだい、これは、てんで物語にも何なりません。（略）たいていの物語は、その妻の「行為」を夫が許すかどうか、そこに重点を置いてゐたやうでしたが、それは自分にとつては、そんなに苦しい大問題では無いやうに思はれました。許す、許さぬ、そのやうな権利を留保してゐる夫こそ幸ひなる哉、とても許す事が出来ぬと思つたなら、何もそんなに大騒ぎせずとも、さつさと妻を離縁して、新しい妻を迎へたらどうだらう、それが出来なかつたら、所謂「許して」我慢するさ、いづれにしても夫の気持一つで四方八方がまるく収るだらうに、といふ気さへするのです。（第三の手記・二）

と述懐している。この姦通事件（以下、『人間失格』のヨシ子の姦通事件を〈ヨシ子事件〉、『暗夜行路』の直子の姦通事件を〈直子事件〉と記述する。）に関して『人間失格』には次のような草稿⁸が見られる。

堀木に誘はれて酒を飲む、／過去をだましてゐる、／信じてゐる

る、／マダムとの関係、いろいろの女、／情死のツネ子との／間も疑つてゐる（□）ない、

処女を犯した事の／憂鬱、罪／暗（□）夜行路／芥川の歯車／ドスト 堀木／との／ちがひ、／根本的／な、ちがひ、幸福感に非ず／人みな（友みな）の／われより偉く見える日よ、

この草稿の「処女を犯した事の／憂鬱／罪」の下部には「暗夜行路」、
「芥川の歯車」、「ドスト」等の記述が見られる。これらの記述から、
「人間失格」の〈ヨシ子事件〉の背景には、志賀直哉の『暗夜行路』、
芥川龍之介の『歯車』、ドストエフスキーの『罪と罰』の三作品を踏ま
えた可能性が高いと見て取れよう。

そこでまず、志賀直哉の『暗夜行路』から検討を加えていきたい。

『暗夜行路』には、直子が幼馴染みで従兄の要と一夜の「過ち」を
犯す事件、いわゆる〈直子事件〉が記されている。

要が不意に寝がへりをした。直子は驚き、手を離れたが、要は
其手を握り、片手を首に巻いて直子の身体を引き寄せた。要は眼
を閉ぢたままそれをした。直子は吃驚したが、小声に力を入れて、
「何をするのよ」と云つた。

「悪い事はしない。決して悪いことはしない」こんな事を云ひ
ながら、要は力で無理に直子を横たへて了つた。

直子は驚きから、一寸喪心しかけた。そして叱るやうに、「要
さん。要さん」と抵抗し、起き上らうとしたが、要は自身の身体
全体で直子を動かさなかつた。そして、

「悪い事はしない。決してしない。頭が変で、どうにもならな

いんだ。」これを繰返した。かう云ふ争ひを二人は暫く続け
て居たが、仕舞ひに直子は自分の身体から全く力が抜け去つ
た事を感じた。それから理性さへ。（後篇 第四・五）

このような事件の後、謙作の苦悩が始まるのであるが、『人間失格』
に記されている、妻を「許すかどうか」という箇所に相当するのは次
の通りである。

・「直子を憎まうとは思はない。自分は赦す事が美德だと思つて赦
したのではない。直子が憎めないから赦したのだ。又、その事に
拘泥する結果が二重の不幸を生む事を知つてゐるからだ」（後篇
第四・六）

・「赦す事はいい。実際それより仕方がない。……然し結局馬
鹿を見たのは自分だけだ」（後篇 第四・六）

・「それも直子自身に少しもさういふ意志なしに起つた事で、僕に
は直子が少しも憎めないのだ。再びそれを繰返さぬやうに云つて
心から赦してゐるつもりなのだ。実際再びさういふ事が起こると
は思へないし、事実直子には殆ど罪はないのだ。それで総てはも
う済んだ筈なんだ。所が、僕の気持だけが如何しても、本統に其
処へ落ちついて呉れない。何か変なものが僕の頭の中でいぶつて
ゐる。」（後篇 第四・七）

『暗夜行路』の「後篇 第四・六、第四・七」には、夫の謙作が妻
の過失という不愉快な事件に遭遇して「赦せる自分と赦せない自分」
が闘争している。そして「精神で赦しても肉体が赦せない」というニ
ュアンスの記述も見られる。従つて、〈ヨシ子事件〉は志賀直哉の

『暗夜行路』を想定した作品である可能性が高い。

次に芥川龍之介の『菌車』の検討に移る。『人間失格』と『菌車』との関連性を把握するために、『菌車』の本文の一部を引用してみる。

しかし大抵は女の話だった。僕は罪を犯した為に地獄に堕ちた一人に違ひなかつた。が、それだけに悪徳の話は愈僕を憂鬱にした。

僕は一時的清教徒になり、それ等の女を嘲り出した。（略）

やつと彼の帰つた後、僕はベッドの上に転がつたまま、「暗夜行路」を読みはじめた。主人公の精神的闘争は一々僕には痛切だった。僕はこの主人公に比べると、どのくらゐ僕の阿呆だったかを感じ、いつか涙を流してゐた。（二 復讐）

『菌車』には主人公の零落や〈罪〉の問題、主人公の〈精神的闘争〉の記述は見られる。しかし、姦通事件そのものは描かれていない。従つて、『人間失格』の〈ヨシ子事件〉は、芥川龍之介の『菌車』を踏まえた可能性はないといえる。

では、ドストエフスキーの『罪と罰』はどうだろうか。ここには終始〈罪〉の問題は語られるが、姦通事件そのものは見られない。ドストエフスキーの他の作品にも姦通事件は殆ど見られないように思われる。

これらのことから『人間失格』の〈ヨシ子事件〉は、『暗夜行路』の〈直子事件〉を踏まえて描かれたものと見て取れよう。

『人間失格』の〈ヨシ子事件〉が『暗夜行路』の〈直子事件〉を踏まえているといえるもう一つの根拠は、姦通事件の前にもう一つの伏線が付け加えられていることである。それは、性的な意味合いを含ん

だ遊びである。『人間失格』にはヨシ子が犯される前提として、〈罪〉を意識した「アント遊び」が描かれている。

「しかし、牢屋にいられる事だけが罪ぢやないんだ。罪のアントがわかれば、罪の実体もつかめるやうな気がするんだけど、……神、……救ひ、……愛、……光、……しかし、神にはサタンといふアントがあるし、救ひのアントは苦惱だらうし、愛には憎しみ、光には闇といふアントがあり、善には悪、罪と祈り、罪と悔い、罪と告白、罪と、…… 嗚呼、みんなシニノムだ、罪の対語は何だ。」（第三の手記・二）

一方、『暗夜行路』にも〈直子事件〉の前に、子供の頃の卑猥な遊び「亀と鼈」の回想シーンが挿入されている。

要は「亀と鼈」といふ遊びをしようと云ひ、直子に赤間関の円硯を出して来さし、其遊びを二人に教へた。（略）

女の児が要の硯を探してゐる間、二人は炬燵に寝ころんでゐた。そして暫く見つけ出し、それを持つて来た時、要はいきなり、「鼈」と怒鳴つて飛起き、一人ではしやぎ、蹴り上つたり、でんぐりがへしをしたりした。

この遊びは下男から教へられた。そして、その卑猥な意味は要だけには幾らか分かつてゐたが、直子には何の事か全く分らなかつた。只、炬燵で抱合つて居る間に直子は嘗て経験しなかつた不思議な気持ちから、頭のぼんやりして来るのを感じた。（後篇 第四・五）

これらはどちらも姦通の〈罪〉を誘引するための伏線であり、共通

性がある。

また、『暗夜行路』における〈罪〉の伏線は、懺悔の娘のお政や愛の遍歴をする栄花のエピソード（後篇 第三・十三）にも見出せる。しかし、後で詳述する『暗夜行路』以外の姦通小説にはこのような〈罪〉を誘引するような伏線は用いられてはいない。従つて、『人間失格』は『暗夜行路』を想定した可能性が高いと思われる。

一方、志賀直哉の「范の犯罪」⁽¹²⁾という作品も妻の過失により、夫が妻を「許すかどうか」の問題で煩悶している。しかし、これは妻が赤ん坊を乳房で圧死させる事件の過失の問題を描いたもので、「人妻の犯された物語の本」には当てはまらない。どちらの条件をも満たすのは『暗夜行路』のみである。

このように、『暗夜行路』は、罪を犯した妻に対し、夫が「許すかどうか」で煩悶する物語であり、『人間失格』の〈ヨシ子事件〉は『暗夜行路』の〈直子事件〉を想定したものである。

2、ヨシ子と直子の造形

次に、ヨシ子と直子の共通点について言及していきたい。

まず、『人間失格』のヨシ子を造形している箇所を取り上げてみる。

けれども、その頃、自分に酒を止めよ、と勧める処女があました。

「いけないわ、毎日、お昼から、酔つてゐらつしやる。」

バアの向ひの、小さい煙草屋の十七、八の娘でした。ヨシちゃんと云ひ、色の白い、八重歯のある子でした。自分が、煙草を買

ひに行きたびに、笑つて忠告するのですた。（略）

「この野郎。キスしてやるぞ。」

「してよ。」

ちつとも悪びれず下唇を突き出すのです。

「馬鹿野郎。貞操観念、……」

しかし、ヨシちゃんの表情には、あきらかに誰にも汚されてゐない処女のにほひがしてゐました。（第三の手記・一）

『人間失格』のヨシ子は、モガのような略語を使い、キスに対してもすぐ唇を突き出す、やや貞操観念の稀薄な現代娘ではあるが、「十七、八」歳の色白で、笑顔の見える「あきらかに誰にも汚されていない処女」と造形されている。葉蔵が初めて、「人間らしい」生活ができるかもしれないと思つた女性である。

次に、『暗夜行路』の直子の造形を列挙してみる。

・ 毎日は見掛けない若い美しい女の人。

・ 快活な響。

・ 女の人は湯上りらしく白い浴衣を不格好に角張らして着てゐた。

・ 彼は自分の心が、常になく落ちつき、和らぎ、澄み渡り、そして幸福に浸つて居る事を感じた。

・ 其内女の人は、ふと彼から見られて居る事を感じたらしく、そして急に表情を変へ、赤い美しい顔をして隠れるやうに急いで内へ入つて了つた。（以上、「後篇 第三・二」）

・ 「あれは君、鳥毛立屏風の美人だ」（「後篇 第三・三」）

・ 一ト言に云へば鳥毛立屏風の美人のやうに古雅な、そして優美な、

それではなければ気持ちのいい喜劇に出て来る品のいい快活な娘。

（後篇 第三・十二）

直子は「白い浴衣」を「角張らし」て着、彼の視線を感じて「隠れ」るような「処女」性のある女性で、「古雅」な「鳥毛立屏風」のような女性として造形されている。直子が登場するのは「後篇 第三」からで、その箇所は大正十一年から十二年にかけて執筆されている。『人間失格』は昭和二十三年の執筆であり、双方の作品には時期的なズレがあるが、ヨシ子ははっきり意思表示する女性として描かれている。しかし、どちらも「無垢」な女性として造形され、共通性が見られる。

3、〈ヨシ子事件〉と〈直子事件〉の実体

『暗夜行路』は母と祖父、妻の直子と従兄の要という同族間の二重の過失に苦しむ主人公像が浮き彫りにされた作品であるが、〈直子事件〉に着目してみると、直子は従兄の要と一夜の「過ち」を犯し、〈罪〉が発覚する。〈直子事件〉の実体は、〈ヨシ子事件〉よりもさらに不透明なもので、妻直子の顔色によってその事件の実体が明らかにされるだけである。

池内輝雄氏は、〈直子事件〉について、次のように述べている。¹⁹

女性の積極的な意志の存在稀薄であるのに、謙作によって「不義」と呼ばれる。明治憲法下で「姦通罪」は、「夫権ノ侵害」（大審院判決、明治36）に対する罪に限られ、妻の権利は無視されていた。「夫権ノ侵害」という観点が重視される限り、姦通を自

ら望んだかそうでなかったかといった女性側の意志の強弱はほとんど問題でなくなってしまうのである。問題はそうした既成の、あるは社会常識の立場から、ものを見る謙作の姿勢であろう。そこには自己をとりまく社会のさまざまな法律・道徳・習慣など、いわゆる制度への批判の眼はあまり見られない。

つまり、直子の「積極的な意志の存在」は「稀薄」であるのに、謙作は明治憲法の姦通罪を踏まえ、「不義」としていることに注目している。

姦通は当時の封建的な規範制度では、女性の「拒否」の意志の強弱に関わらず、それは「不義」として扱われた。現代ならそれを「過失」と言っても、「不義」などとは言えず、このような意味で『暗夜行路』は明治時代の姦通のあり方を示した作品だといえる。

これに対し、『人間失格』の〈ヨシ子事件〉はどうだろうか。やはり、「自分の部屋の上の小窓があいてゐて、そこから部屋の中が見えます。電気がついたままで、二匹の動物がゐました。」と表現されるだけで、前述のようにその実体は不透明である。ヨシ子が「強姦」されたのかどうかさえもわからない。

ヨシ子は「内縁」であっても、「結婚」した女性である。従って、男の誘惑に対し「拒否」や「抵抗」は出来たはずである。しかし、その行為の直後には、葉蔵だけの心情「神社の杉木立で白衣の御神体に逢った時に感ずるような古代の荒々しい恐怖感」が語られるだけで、ヨシ子の抵抗の様子やヨシ子の実感は一切示されていない。

『暗夜行路』の謙作は、直子の「過失」に対して煩悶し、衣服を切

り裂いたり、ホームへ突き落としたりと凶暴な行為を繰り返す。しかし、葉蔵は最初からヨシ子を「信頼の天才」とし、それが〈罪〉だとしてゐる。それを証拠に「ゆるすも、ゆるさぬありません。ヨシ子は信頼の天才なのです。ひとを疑ふ事を知らなかつたのです。」と言ひ、「ヨシ子が汚されたといふ事よりも、ヨシ子の信頼が汚されたといふ事」が、「苦悩の種」になつたと述懐してゐる。一般的には、夫は『暗夜行路』の謙作のように妻が犯されたことに激怒し、懊悩するはずである。妻の「信頼」を汚されたことよりも、妻そのものを辱められたことに怒りを爆発させるはずである。しかし、葉蔵は激怒するわけではなく、そのような出来事に戦慄を覚えるだけである。

明治民法（一八九八〔明治三十一〕年六月）では、姦通罪（刑法一八三条 有夫ノ婦姦通シタルトキハ二年以下ノ懲罰ニ処ス、其相姦シタル者亦同シ）は、家制度の美名のもとに離婚原因は妻の姦通のみとされた。従つて『暗夜行路』では、たとえそれが過失であるとしても、女性是不利な立場に立たされてゐる。しかし、『人間失格』の成立した昭和二十二年には刑法一八三条は廃止され、姦通によつて女性に刑法上責任を問われなくなつた。憲法の改正と共に女性の意識もかなり変化してゐることは事実である。

このように『人間失格』は「コキユ」の問題を取り上げることにより、姦通罪の解消を提示すると共に、女性の地位の向上をも描こうとしたのだと思われる。

4、従来の姦通小説との比較

既に、『人間失格』の〈ヨシ子事件〉は、『暗夜行路』を踏まえた可能性が高いことを指摘したが、太宰の『東京八景』には、「ルソオの懺悔録」という記述があるのに気づく。

その夜私は悪いものを読んだ。ルソオの懺悔録であつた。ルソオが、やはり細君の以前の事で、苦汁を嘗めた箇所に突き当り、たまらなくなつて来た。

「ルソオの懺悔録」とは『告白』¹⁷という作品であり、これは、姦通小説でもある。

ルソオの『告白』（上）には、ジャン・ジャックと思われる主人公「私」が、恋人クロード・アネのいるヴァランス夫人と過ちを犯す。そこには懊悩などという記述は殆ど見られない。ただ、『告白』（下）にはリボンの盗難事件と哀れなマリオンが暇を出される嘘の告白が語られ、この「罪」が「私」のその後の人生に「烙印」を残したとされる。ここには主人公の懊悩は描かれるが、「許すかどうか」の問題で苦悩する主人公像は見られない。従つてルソオの『告白』は〈ヨシ子事件〉には直接には関係してゐないと思われる。

次に、その他の先行作品について検討してみる。

姦通という表現は、日本文学では近世の世話浄瑠璃、武士の妻おたねと鼓師との密通を描いた『堀川波鼓』¹⁸や京の大経師の家で起こつたおさんと茂兵衛の姦通事件『大経師昔暦』¹⁹あたりから見られるが、わが国の近代小説の中で姦通小説と言われるは、貫一、お宮の悲劇を扱

った尾崎紅葉の『金色夜叉』⁽²⁰⁾、早月葉子の悲劇を描いた有島武郎の『或る女』⁽²¹⁾、代助が平岡の妻三千代の心を奪うという夏目漱石の「それから」⁽²²⁾、同じく夫、野中宗助の妻、御米と安井との関係に苦悩する「門」⁽²³⁾等がそれに相当する。

これらの四作品にも、姦通は描かれているが、夫がそれを「許すかどうか」で煩悶してはいない。

一方、太宰治が眼にした可能性のある外国文学は、ロシアの貴族社会を扱った、トルストイの『アンナ・カレーニナ』⁽²⁴⁾やフランスのフロベールの『ボヴァリー夫人』⁽²⁵⁾等である。『アンナ・カレーニナ』の妻のアンナは、夫カレーニン以外の青年将校ヴロンスキーと密通を重ねる。又、『ボヴァリー夫人』の美貌の主人公エンマは夫のシャルルに飽きたらず、ロドルフやレオンと密通を重ねる。しかし、これらの外国文学も、妻の過失を夫が「許す、許さぬ」などと煩悶する姿は描かれてはいない。従って、『人間失格』は『暗夜行路』を想定した作品であるといえるのではなからうか。

七、『暗夜行路』の想定

『人間失格』は『暗夜行路』を想定した作品であることを指摘した。女性に焦点を当てたならば、共通点は「コキユ」の問題、母親の欠落、醜い女や水商売の女性、年上の女性との接触などである。

『人間失格』に「コキユ」の問題を取り入れたのは、ヨシ子の「過ち」を契機として、葉蔵に打撃を与え、〈男の破滅物語〉を描こうと

したためであると思われる。特に、ヨシ子は、今まで葉蔵が接触した中で唯一の「処女」であり、「信頼の天才」と信じてやまなかった女性である。それが、あくどい「商人」に、いとも簡単に凌辱されてしまふ。葉蔵は〈神〉に打たれたような「戦慄」を覚え、「人間失格」へと貶められてゆく。

『暗夜行路』の執筆された大正九年から昭和十二年にかけては、姦通罪は女性に一方的に適用され、女性にとつては不利なものであった。戦後になって女性に対する法制度も改正され、姦通罪は廃止された(昭和二十二年)。「コキユ」の物語には、このような法改正の問題も含まれていたように思われる。

『人間失格』に母親の存在が稀薄なのは、葉蔵を徹底的に破滅へと追い込むためである。母親との関係が緊密であれば、葉蔵の精神状態は安定し、「人間失格」にまで至らしめられはしない。

醜い女は、どちらも性の手ほどきをする存在として設定されている。しかし、『人間失格』の女中は、劣位極まりない「醜い老女中」として登場し、葉蔵はその老女中から数度も犯されている。特権階級の葉蔵と下層階級の女中の位相は完全に逆転している。ここには葉蔵が地の底へ転落したことを示すと同時に、ヒエラルキーや男女の差異が消滅したことを意味している。そればかりでなく、女性の〈遅しさ〉をも提示しているのではないか。

水商売の女性も、共に精神の解放をもたらす存在ではあるが、『人間失格』の方は、葉蔵の自我に深く関わっている。葉蔵はインテリサロンのカフェからアルコールの介在するバーへ、さらにはエロサービ

スの濃厚な酒池肉林のバーへと足を運ぶようになり、零落してゆく。彼女達は、一時的には解放をもたらすが、結局は葉蔵を墮落させるものでしかない。

年上の女性達は葉蔵を徹底的に甘えさせる。秘密結社の「同志」は、やたらに「もの」を買い与え、銀座の女給ツネ子は飲み代を支払い、ジァールを購入する。雑誌記者のシヅ子は賄を提供し、スタンド・バアのマダムはその他にお酒も提供する。葉屋の未亡人は「モルヒネ」を簡単に与えてしまう。年上の女性達は葉蔵を甘えさせ、転落させてゆく。

太宰は随筆「如是我聞」の中では、志賀直哉を痛烈に批判している。しかし、太宰作品には終始、志賀の作品や「志賀直哉」という名前を投影している。²⁶太宰が集大成として意気込んで創作した『人間失格』は、志賀直哉の『暗夜行路』をかなり意識し、それを上回るような作品を構想していたのではないか。妻を「許す、許さぬ」で煩悶し、女性を乗り越えて行く物語ではなく、女性を「恐怖」の対象として捉え、女性と接触することにより「人間失格」にまで至らしめられるという〈男の破滅物語〉を構築しようとしたのではなからうか。

八、むすびに

『人間失格』も『暗夜行路』も主人公は〈生活不能力者〉として描かれているが、『人間失格』の葉蔵は多くの女性と関わっていくうちに「人間失格」者として貶められてゆく。

『人間失格』と『暗夜行路』の女性に焦点を当てて比較してみると、相似しているのは母の欠落である。どちらの作品も父親は恐怖の対象として重要な位置を占めているのに対し、母の存在は極めて稀薄である。

醜い女については、『人間失格』のそれは、かなり重要な役割を果たしている。「女道楽」や「放蕩」を繰り返した後の主人公は、双方とも諦めに似た境地で「醜い女」と暮らそうとする。『暗夜行路』では謙作はそれを夢想するだけだが、『人間失格』の葉蔵は実際に夫婦同然に暮らし、変な「犯され方」さえする。女中と主人公の立場は完全に逆転してしまう。

又、どちらの主人公も性的対象の「水商売」の女性と接触する。『暗夜行路』の謙作は吉原の引茶屋や銀座で遊び、深川曲輪で放蕩する。謙作はこれらの女性との関係を断ち切ろうと尾道へ行くが、ここでも百姓娘のプロステイチュートを相手にする。祖父の妾のお栄も「性的な匂い」のする女性で、常に結婚を意識する女性である。が、結果的には、謙作はお栄との気持ちを乗り越え、直子の「過失」も乗り越えて、再生してゆく。謙作にとって水商売の女性は一過性の存在で、苦難を乗り越えるための存在ではない。

『人間失格』の葉蔵も数多くの水商売の女性と接触してゆく。それらの女性達は一時的には「母の代理」となり、憂さを紛らす存在となる。しかし、接触する度に零落しゆき、最終的には破滅させられる。

年上の女性達も葉蔵を甘えさせ、やはり、麻薬中毒で転落させてしまふ。

最後は、妻としての女性、ヨシ子と直子の造形である。どちらも、〈無垢性〉のある女性として描かれ、共に犯されてしまう。直子の「過ち」は謙作の苦悩の種とはなるが、謙作は最終的には直子を許す。しかし、「信頼の天才」と信じられたヨシ子は、〈都会悪〉の商人に凌辱され、それを知った葉蔵は戦慄を覚え、破滅してしまう。

このように、太宰の『人間失格』は、かなりの部分で志賀の『暗夜行路』を想定した作品であるといえる。

太宰は集大成ともいえる『人間失格』を執筆するのに『暗夜行路』をかなり意識していたのではないか。主人公はどちらも傷つきやすい人物であるが、『人間失格』は、女性の問題を一層深刻にすることに、〈男の破滅物語〉を構築しようとしたのであろう。

戦後になって女性に対する法制度も改正された。姦通罪も昭和二十二年に廃止され、父権制度から男女同権の制度へと移行されてきている。しかし、女性はまだまだ軽視され、法の矛盾点も多い。²⁷ 太宰はそこに視点を置き、「コキユ」の物語を描いたのだと思われる。その底流には、性差や身分の問題も想定されていたように思われる。

〔注〕

- (1) 志賀直哉『暗夜行路』(一九七三〔昭四八〕年六月、岩波書店)
- (2) 「シンポジウム『新しい太宰治論は可能か』——『人間失格』論を中心に」(『国文学解釈と鑑賞』一九八一〔昭五五〕年一〇月、至文堂)
- (3) 「『暗夜行路』を念頭に」(『太宰治』一九九八〔平一〇〕年五月、岩波新書)

- (4) 「『人間失格』論 コキユの狼狽」(『太宰治』一九九一〔平三〕年六月、洋々社)
- (5) 「『人間失格』『暗夜行路』と比較して」(『太宰治』一九八五〔昭六〇〕年七月、洋々社) 五 平素は冷たい父が急に主人公の謙作に角力を取ろうと言いつ出す。父の親愛の情が、徐々に憎しみに変転する。祖父と母との不義の子としての父親の冷徹さを描いた事件。
- (6) 「『人間失格』再論——不神「エホバ」と神の子「イエス」」(『京都語文』創刊号 一九九六〔平八〕年一〇月、佛教大学)
- (7) 卷正平『姦通のモラル』(一九五九〔昭三四〕年七月、光文社)
- (8) 〈決定版〉『太宰治全集』(第十三巻・一三三ページ 一九九九〔平一一〕年五月、筑摩書房)
- (9) 「ドスト」は、「ドストエフスキイ」の略だと思われる。葉蔵と堀木の「アント遊び」(『第三の手記・二』) には「罪と罰。ドストエフスキイ」の記述が見られる。従って、『人間失格』の一部には、ドストエフスキイの「罪と罰」を想定したと考えてもよからう。「罪と罰」に関しては、東郷克美他「共同討議 太宰治の作品を読む」(一九八二〔昭五七〕年五月、『国文学』)、「シンポジウムⅡ『人間失格』をめぐる」(一九八五〔昭六〇〕年一月、『解釈と鑑賞』) 等において、作中のアント遊びとドストエフスキイの「罪と罰」との対応関係について考察されている。
- (10) 芥川竜之介「蘭車」(『文芸春秋選書』一六 一九四八〔昭二三〕年、文芸春秋新社)
- (11) ドストエフスキイ「罪と罰」(第二巻 一九二八〔昭三〕年、岩波書店)
- (12) 「志賀直哉全集」(第二巻 一九三七〔昭四八〕年三月、岩波書店)
- (13) 「志賀直哉の領域」(一九九〇〔昭六二〕年八月、有精堂)
- (14) 金城清子『法女性学のすすめ』(一九八三〔昭五五〕年四月、有斐閣)

- (15) 末川博編著『六法全書』（一九三二（昭和七）年、岩波書店）、『六法全書』（昭和二三年版）一九四八（昭二三）年、有斐閣。昭和二二年度以前の『六法全書』には刑法一八三条は掲載されているが、昭和二三年度以降のものは抹消されている。

(16) 右に同じ

- (17) ルソー『告白』（桑原武夫役訳 上、下 一九一五、一九一六〔大四五〕年、岩波書店）

- (18) 『近松全集』（第四巻 一九七五〔昭五〇〕年七月、近松全集刊行会）

- (19) 『近松全集』（第九巻 一九八八〔昭六三〕年九月、近松全集刊行会）

- (20) 尾崎紅葉『金色夜叉』（上、下 一九七七、一九七八〔昭五二、五三〕年、岩波書店）

- (21) 有島武郎『或る女』（一九五二〔昭二六〕年、岩波書店）

- (22) 夏目金之助『それから』（『漱石全集』第六巻 一九九四年〔平六〕年五月）

- (23) 夏目金之助『門』（『漱石全集』第六巻 一九九四年〔平六〕年五月、岩波書店）

- (24) トルストイ『アンナ・カレニナ』（一九二一（大一〇）年、新潮社）

- (25) フロベール『ボワリイ夫人』（中村屋湖訳『世界文学全集』二十一 一九二七〔昭二〕年、新潮社）

- (26) 鶴谷憲三「志賀直哉との《関わり》を梃子として」（充溢と欠如『太宰治論』一九九五〔平七〕年八月、有精堂出版）には、志賀直哉の名前（志賀直哉と想定できるものも含む）が表記されている作品が、昭和十年十二月の随想「もの思ふ葦」、同十二年十二月十日の随想「創作余談」、同十四年四月の小説「懶惰の歌留多」、同十四年十月の小説「美少女」、同十五年四月の小説「誰も知らぬ」、同十五年九月の随想「自作を語る」、同七年六月の小説「正義と微笑」、同十九年十一月の小説「津軽」、同

二十一年四月の小説「十五年間」、同二十二年四月の座談会「現代小説を語る」の中での発言、同二十三年三月〜七月随想「如是我聞」等、随想四、小説六、座談会での発言が見られるとの指摘がある。その他、太宰治の習作「角力」（大正一四年十月）にも志賀直哉の影響が見られる。拙稿「角力」論（『太宰治研究』10 二〇〇二〔平一四〕年六月、和泉書院）

- (27) 法文上、姦通という言葉は消えたが、民法の条文に「不貞」なる言葉が表れた。第七百七十条の離婚原因に関する規定の第一項にある「配偶者に不貞な行為があったとき」がそれであり、その観念は「不貞」という言葉の中で生きている。（参考）註一四の『法女性学のすすめ』

但し、底本は第一〇次筑摩書房版『太宰治全集』全二巻・別巻（一九九八年五月〜一九九二年四月）を使用。

（あおき きょうこ）

佛敎大学総合研究所研修員

（指導敎授）三谷 憲正敎授

二〇〇二年十月十六日受理

